アイヌ民族の歴史と文化　第11回

―〈ひと〉〈暮らし〉〈ことば〉からさぐる―

アイヌ語 ―時間の表現をさぐる

吉川　佳見（よしかわ　よしみ）
北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究職員
東京外国語大学非常勤講師

1989年富山県高岡市生まれ。東京外国語大学日本語専攻卒。千葉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程、後期課程修了。博士（文学）。2021年より北海道博物館勤務。専門は言語学、アイヌ語学。

アイヌ語は日本にある言語のうちのひとつですが、日本語とは単語も文法も異なるまったく別の言語です。アイヌ語は、発音や語彙（い）や文法の差異などから、北海道方言、樺太方言、千島方言の３つにまず大別されます。それぞれの方言はさらに細分化でき、筆者は主に北海道南西部の方言のうちの沙流方言や千歳方言の研究をしています（今回出てくるアイヌ語の用例もこれらの方言のデータに基づくものです）。

アイヌ語は近年急激に母語話者数が減少し、2009年にユネスコ（国連教育科学文化機関）が発表した「消滅の危機にある言語」のなかでは最も高い危機レベルに認定されています。言語学の調査方法として、母語話者のところに行ってインタビューをし、その言語の用例を収集・分析するという方法がありますが、こうした調査はアイヌ語では現在極めて困難となっています。また、現在公刊・公開されているアイヌ語資料は、音声資料であれ筆録資料であれ、そのほとんどが物語資料で、会話資料はあまりありません。筆者も８年程前からアイヌ語の学習・研究をはじめましたが、用例のほとんどは既存の物語資料から集めています。

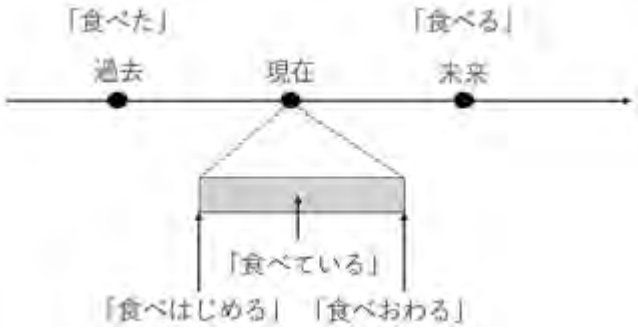
言語の研究と一言で言っても、発音なのか、単語の成り立ちなのか、文をつくる仕組みなのか･･･研究対象はいろいろとありますが、筆者が研究しているのは、おもに「時間」にかかわる表現です。ここからは「時間」にかかわる表現について、日本語とも比べながらお話します。

テンス、アスペクト―出来事と時間の関係

言葉でどのように「時間」を表現するかというのは、言語・方言によってさまざまです。言語学の用語で、テンス（時制）とアスペクト（相）というものがあります。テンスとは、過去・現在・未来など事態の外的な時間に関係するもので、事態が時間軸上のどこにあるかを表しわけます。一方アスペクトとは、事態の内的な時間に関係するもので、事態のどの局面に注目しているかを表しわけます。

日本語の標準語では、テンスはル形・タ形の区別によって表します。たとえば、「昨日カレーを食べた。」「明日カレーを食べる。」のように、過去のことは「～（し）た」、非過去（現在や未来）のことは「～（す）る」という形になります。

アスペクトについては、いま出来事が行われている最中である場合、「～（し）ている」というテイル形を用いて、「いまカレーを食べている。」のように表現します。つまり、「継続」という局面に注目していることになります。過去のある時点において「食べる」という動作が継続していた場合には、「昨日カレーを食べていた。」のように「～（し）ていた」という形になります。日本語の標準語は、基本的にはこうしたル形、タ形、テイル形、テイタ形の４つの形式を組み合わせて、出来事が時間軸上のどこにあり、出来事のどの局面にあるのかを表現します。アスペクトに関しては、テイル形のほか、「～（し）はじめる」「～（し）つづける」「～（し）おわる」のような表現もあります。「～（し）はじめる」は事態の開始、「～（し）つづける」は継続、「～（し）おわる」は終了という局面に注目しています。



アイヌ語のテンス

では、アイヌ語のテンス・アスペクトはどのようになっているのでしょうか。まずテンスについてですが、アイヌ語では過去や未来を区別しません。たとえばアイヌ語で「来る」は「ek（エㇰ）」といいますが、日本語のように「来る」「来た」といった動詞の活用をせず、昨日来たのであっても明日来るのであっても、形は ek のままです。ek がいつのことなのかは、昨日や明日など時間にかかわる副詞を付けたり、場や文脈から判断したりします。

昨日太郎が来た。　numan　TAROU　ek.
（ヌマン　タロウ　エㇰ。）

明日太郎が来る。　nisatta　TAROU　ek.
（ニサッタ　タロウ　エㇰ。）

過去や未来を区別しないというのは、あくまで言葉の上でのことであって、概念上の区別がないということではありません。たとえば日本語ではル形・タ形の区別がありますが、ル形は「非過去形」、タ形は「過去形」とされます。つまり、過去かどうかという区別はあるのですが、現在か未来かという区別は言葉の上では行われません。ですが、ふだん概念としては現在と未来は別のものとして認識しているはずです。概念としての区別と言葉としての区別は、必ずしも一致しません。

アイヌ語のアスペクト

次にアスペクトについてですが、アイヌ語の多くの方言にある表現として、「kor an（コロ アン）」と「wa an（ワ アン）」があります。どちらも日本語標準語ではテイル形で訳すことができる形式なのですが、「kor an」と「wa an」には使い分けがあり、「kor an」は動作や変化の最中にあることを、「wa an」は変化が終わったあとの状態にあることを表します。kor（コロ）やwa（ワ）は接続助詞とよばれるもので、korは「～（し）ながら、～（し）つつ」、waは「～（し）て」という意味を表します。an（アン）は存在動詞とよばれ、「ある／いる／なる／暮らす」という意味を表す動詞です。

たとえば、動詞ek「来る」の後ろに「kor an」を置いたものと「wa an」を置いたもので比べてみると、具体的には、前者の「ek kor an（エㇰ コロ アン）」はバスが今まさにバス停に向かってやって来ているのを見ているとき、後者の「ek wa an（エㇰ ワ アン）」はバスがもうバス停に到着しているのを見ているようなときです。このふたつの状況は、(1)「来る」という動作・変化の最中である場合と、(2)「来る」という変化が終わって、その変化の結果の状態にある場合ですが、日本語標準語ではどちらもテイル形で表すことができます。（先ほど「概念の区別と言葉の区別は一致するとは限らない」という話をしましたが、これもその例のひとつと言えます。）

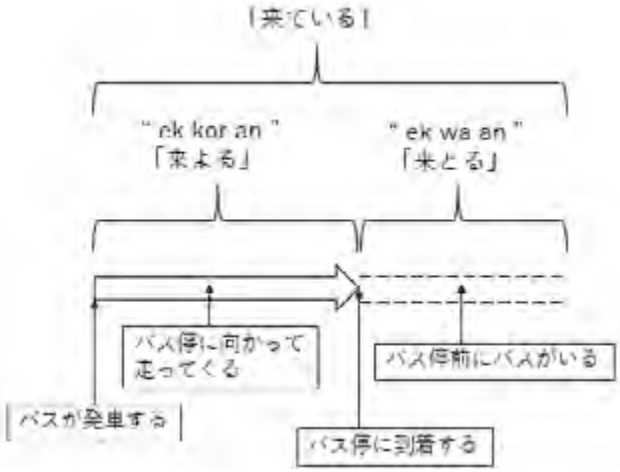
実は、京阪地域を除く日本語西日本諸方言にも「kor an」「wa an」に似た区別をする方言があり、「来よる」、「来とる」のように、「～（し）よる」「～（し）とる」という区別をもつ方言がみられます。

(1)
【日本語標準語】　バスが来ている。
【日本語西日本諸方言の一例】バスが来よる。
【アイヌ語】

BASU	ek	kor	an
バス	エㇰ	コロ	アン
バス	来る	ながら	いる

(2)
【日本語標準語】　バスが来ている。
【日本語西日本諸方言の一例】バスが来とる。
【アイヌ語】

BASU	ek	wa	an
バス	エㇰ	ワ	アン
バス	来る	て	いる



何が問題か

とはいえ、すべての動詞について、この使い分けが成り立つわけではありません。「kor an」しか取らない動詞や「wa an」しか取らない動詞もあります。たとえば、動詞apkas（アプカシ）「歩く」には、「apkas kor an」（「歩いている」＝「歩く」という動作の継続）という用例はありますが、「apkas wa an」という用例は見当たりません。一方、動詞 a（ア）「座る」には、「a wa an」（「座っている」＝「座る」という変化の結果の継続）という用例はありますが、「a kor an」という用例は見当たりません。「a kor an」は、理論上は「座る」という変化の進行中（たとえば、今まさに床に座ろうと腰をおろしつつある様子）を表すことができそうですが、用例がないために推測の域を出ません。

また、「kor an」と「wa an」のどちらも取る動詞について、先述のように「動作や変化の最中にある」のか「変化が終わったあとの状態」なのかという違いが生まれる動詞のほか、「kor an」でも「wa an」でも意味の違いが見出しにくいという動詞もあります。「kor an」「wa an」を取り巻く問題は多く、ここでひとつひとつ言及することはできないのですが、「kor an」「wa an」を日本語に置き換えようとしたときにどういうことが起きるかについて少しお話します。

「テイル」と似ているけど

アイヌ語のアスペクトの話の中で、「kor an」「wa an」はどちらも日本語標準語ではテイル形で訳すことができると言いました。しかしだからといって、テイル形を「kor an」か「wa an」のどちらかに置き換えなければならないというわけではないですし、また、「kor an」「wa an」はいつでもテイル形に置き換えられるわけではありません。

「テイル形を「kor an」か「wa an」のどちらかに置き換えなければならないというわけではない」というのは、日本語で「～（し）ている」としなければいけないところでも、アイヌ語では動詞によっては「kor an」や「wa an」が付かない例もある、ということです。たとえば、「座っている」という変化の結果継続を表す場合でも、「a wa an」のほかに、動詞 a（ア）が単独で用いられている用例があります。つまり、wa anを付けなくても、「座っている」という継続は表せるということです。

そして、「いつでもテイル形に置き換えられるわけではない」というのは、たとえば、次のような例です。

a＝kor　humi　pirka
私たち＝～を持つ　感じ　良い
kor　oka＝an
ながら　いる／暮らす（複数形）＝私たち
「気持ちよく私たちは暮らし･･･」（千葉大学編2015：211）

これは物語の主人公（私）が話しているシーンですが、pirka（ピリカ）「良い」のあとに「kor an」（ここでは an が複数形の oka という形になっています）が続いています。「良い」や「大きい」などは日本語では形容詞にあたりますが、アイヌ語では動詞に含まれます。それは、「良い」ならば「良くなる」、「大きい」ならば「大きくなる」など、アイヌ語では形容詞的意味を表すものは動詞的意味（「～になる」という変化の意味）も表すからというのが理由のひとつなのですが、この形容詞的意味の動詞にも「kor an」「wa an」は付くことができるのです。ここでは、「a=kor humi（アコロ　フミ）（私たちの気持ち、直訳：私たちが持つ感じ）」が「pirka（良い）」という状況でいることを言っているのですが、ここで「kor oka」を「ている」にそのまま置き換えて訳そうとすると、「気持ちが良くている」のような不自然な言い回しになってしまいます。そのためここでは、an（oka）の意味のひとつである「暮らす」という訳があてられています。このように一見テイル形への単純な置き換えで訳せそうに思えても、実際にはうまくいかないことはよくあります。

死んでいるのに「死んでいない」？

テイル形に関連したことをもうひとつ取りあげてみます。たとえば、道で猫の死骸に遭遇したとき、日本語では「あ、猫が死んでいる。」のように言うことができるでしょう。また、「うちの猫はもう３年前に死んでいる。」や「100年後には、その猫は死んでいる。」といったように、テイル形は、現在のことだけではなく、過去や未来のことにも用いることができます。

さて、アイヌ語では「猫が死んでいる」は「cape

ray wa an（ チャペ ライ ワ アン ）」（ cape「猫」、ray「死ぬ」、wa「～して」、an「いる」）と言えますが、これは、いま目の前で「猫が死んでいる」ことは言い表せても、管見の限り、少なくとも「うちの猫はもう３年前に死んでいる。」といった場合には使えないようです。つまり、猫が死んでいて、その死骸を目の当たりにしているようなときには「ray wa an」と言えますが、すでに死んでしまっていてもう死骸は無いときには「ray wa an」は言えないと推測されます。では、死んでしまってもう姿形が無い場合にはどう言うのかと言うと、これは「ray wa isam（ライ ワ イサㇺ）」という表現になります。

isam（イサㇺ）は、「ない、いない、なくなる」という意味を持つ動詞で、何かが「存在しない」ことを表します。たとえば、cape isam（チャペ イサㇺ）は、「猫がいない」となります。この isam が接続助詞 wa の後ろにきてwa isam（ワ イサㇺ）という形式で使われることがあります。このとき、wa isamは「～てしまった」と訳されることがしばしばあり、以下のような文脈で使われます。

TARO	wakka	ku	wa	isam
タロウ	ワッカ	ク	ワ	イサㇺ
太郎	水	～を飲む	て	ない

「太郎は水を飲んでしまった。（水を飲んで、もう水がない状態）」

「ku wa isam」の単語をひとつひとつ直訳すると、「飲ん・で・ない」となりますから、「飲んでいない」と訳せそうな気がするかもしれませんが、それでは誤訳になってしまいます。

「wa isam」についてもうひとつ注意すべき点としては、日本語の「～てしまう」との違いです。日本語の「～てしまう」には、たとえば、「（間違えて）書いてしまった」のように、意図せずに・うっかりと、というニュアンスがありますが、アイヌ語の「wa isam」にはこのニュアンスはありません。「wa isam」は、「消失」が前提となる形式であって、上記のような「（間違えて）書いてしまった」という文脈では何らの消失もないので、「wa isam」を使うことはできません。

「新しい」アイヌ語資料

現在、アイヌ語母語話者からの聞き取りによる言語調査はほとんどできなくなってしまいましたが、アイヌ語の研究資源は決して枯渇したわけではありません。既存の採録資料でもまだまだ分析が必要なものがたくさんありますし、また、今後アクセス可能となる資料が増えていくことも期待されています。

以前筆者が所属していた千葉大学アイヌ語研究会では、十勝の郷土史家であった沼田武男（1914～1957）が筆録したアイヌ語資料の一部について、その翻刻・日本語訳･解釈を行い、報告書として発行しました（千葉大学アイヌ語研究会編『沼田武男「採訪帖」―アイヌ語十勝方言テキスト集―』、2021年）。沼田氏はアイヌ語や口承文芸、アイヌ文化について筆録したノート類を大量に遺していましたが、他者による分析はほとんどされていないままだったところ、2017年に同研究会がその機会をいただくことができました（経緯の詳細は報告書参照）。

このように、存在はわかっていながらも、翻刻や文字起こしなどが進んでいないアイヌ語資料は、まだまだ各地にあることが予測されています。いまはまだよくわからないことも、より多くの資料から用例を集めていき、どのような文脈でどのように使われているのかを調べることによって、その成果を言語学だけでなくアイヌ語学習の場などに共有していくことができます。

今回取り上げたような時間に関係する表現は、アイヌ語を読むだけでなく、アイヌ語で文章を作ろうと思ったときにも大事になる要素です。アイヌ語で日常会話が普通に行われていた時代ならば、表現が適切かどうかをその都度複数の母語話者に確かめることもできたはずですが、それが困難となった現在では、用例の蓄積から可能な限り答えを導き出していくことが重要です。研究結果はすぐに活用できるものとは限りませんが、議論の材料となり、よりよい形となって社会に還元されるよう、研究を進めていくことが私たちの仕事のひとつです。

参考文献

・ 千葉大学編（2015）『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第２年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書 1 / 3』千葉大学。